

動山を越え、越中水見に至つて神保安藝守氏張に憑り、情を信長に告げた。是より後連龍は氏張の妹を娶り、これを助けてその敵と戦ひ、且つ信長との連絡を絶たなかつた。翌七年能登に在つては温井景隆等、越將醜坂長實を逐うて七尾城を奪うた。連龍はこの冬配下を率ゐて羽咋郡敷波の本泉寺に入つて營したが、景隆等は所々に堡寨を構へて防備を嚴にしたから、翌八年初春一たび越中に歸り、三月また福水に來つて福水寺に據り、閏三月十四日そこを發して、佐久間盛政と軍事を議する爲加賀に赴いた。時に盛政は河北郡木越光德寺を攻めようとしてゐたので、連龍は柳橋で邂逅し、共に光德寺を陥れた後福水に還つた。同月温井筑前守は福水を窺うたが、連龍は飯山でそれを破り、進んで本郷の鉢伏山の壘を奪ひ、又白瀬山に堡を築いて鈴木因幡を置き、以て七尾城攻撃の準備を爲した。因幡は前に上杉軍に居たものである。是に至つて景隆等その敵し難きを知り、連龍に憑つて罪を信長に謝したが、連龍はそれを信長に介すると共に、景隆等が父兄の仇敵たるを以て之を得て甘心せんことを請うたので、和議遂に成立しなかつた。因つて六月九日金丸に在つた温井勢は本郷の壘を陥れんとして兵を進めたから、連龍は菱脇に迎へて敵を破つた。廿八日温井三左衛門等亦七尾の兵を率ゐて金丸に出で、連龍及び鈴木因幡の爲に撃退せられた。この年温井下總は穴水に土民を嘯集し、また連龍の爲に逐はれた。かくて七尾軍は各方面に利を失うたので、景隆は第三宅長盛を安土に派して降を容れしめ、信長は之を許すと共に徳山五兵衛則秀を能登に下し、連龍に

舊怨を棄つべきことを諭し、その軍功を賞して鹿島半郡を興へた。九年三月越中松倉城の河田長親は上杉景勝を奉じ、小出城に佐々成政の兵を攻圍した。信長乃ち越前柴田勝家・前田利家・不破直光等を遣はして之を征せしめ、連龍も亦加つて景勝軍を退却せしめた。同月信長は菅屋長頼・前田利家・福富行清をして假に能登の國政を管せしめたが、遊佐續光は到底多年の罪科を免れ得ざるを測つて遂電した。因つて連龍は之を求め、六月鳳至郡二石村に在るを得てその一族を殺害した。七月温井景隆亦越後に逃れ、長氏の舊怨悉く報いられたのみならず、連龍は信長から鹿島半郡内に在る謙信が亂入以後石動山に寄進した新神領を加恩せられ、八月信長が能登一國を前田利家に興へるに及び、連龍は之が興力たることを命ぜられた。十年五月上杉氏の部將が越中魚津城を占領するや、信長は柴田勝家が以下をして之を討たしめ、連龍も亦加つたが、その間に乘じて越後の長興市景連が海を航して能登に上陸し、鳳至郡榑木城に據つたので、連龍は直に歸り、廿二日討つて之を戦歿せしめた。次いで連龍は再び魚津に赴いたが、城途に陥り、且つ信長が明智光秀の爲に横死した報を得て歸り、七月利家の石動山征討の軍に従ひ、戦後石動山神領の鹿島郡中に在るものを利家から興へられた。この神領は去年信長から得た新神領以外のものなるべく、連龍の鹿島半郡中に領するもの合計三萬石になつた。九月五日利家はまた誓書を連龍に興へて、永く締盟を渝へざることを誓うた。十一年利家金澤に移り、十二年末森役の起つた時、連龍が赴援したのは戦鬪の既に終つた後であ

つたが、利家から『拔群之志無比類』との賞詞を興へられた。長家家譜に據れば、この役の直前佐々成政の將神保氏張が荒山を越えて二宮に來たので、連龍は徳丸から出てそれを追うたとあるが、その事の眞偽は尙研究を要する。十三年羽柴秀吉の越中に佐々成政を攻めた時、連龍はまた軍に従うた。この天正十二三年には連龍が徳丸城に居たらしく、その後田鶴濱に館したのであるが、移徙の年紀を傳へぬ。連龍また慶長五年大聖寺の役に従ひ、歸路浅井曠で丹羽軍の追撃を受け多數の家士を失ひ、戦後加賀に千石の地を加賜せられて三萬二千石となつた。十一年家を嫡子好連に譲り、剃髮して如庵と稱したが、十六年好連歿し、次子連頼尙幼であつたから、再び事を執つて好連の遺領三萬三千石を襲ぎ、大坂兩役に出陣し、元和五年二月三日七十四歳で歿。法號東嶺寺制功良顯。田鶴濱の東嶺寺に葬られた。

あつたが、文政十一年二月長連愛に養はれ、新知二千五百石(内五百石與力知)を賜ひ、天保二年十二月四日その後を襲いで遺知三萬三千石(内二千石與力知)を受けた。連龍處士上田耕の説を信じ、之を藩政の實際に應用せんとしたが、奥村繁實の反對するものあるを以てその意を果さなかつた。然るに十四年榮實卒し、弘化四年十二月廿七日連弘は從五位下大隅守に任ぜられて、同志と共に新法の施行に従うたが、その爲す所往々奇矯に走るものがあつたから、嘉永二年の頃から世人は之を目して黒羽織黨といひ、大に非難するに至つた。藩侯齊泰も亦朋黨の弊を思ひ、安政元年六月十七日連弘の年寄職を擡うた。連弘安政四年四月廿二日歿し、享年四十三であつた。法號保合齋、野田山に葬られた。

チヨウツラヒヒ 長連豪 初名此木小次郎。安政三年能登の穴水に生まる。此木氏は長氏から出て之に臣事した。連豪の父連潔の時二百石を受け、維新の後本姓に復した。連豪明治七年より九年に至る間薩南に遊ぶこと兩次、桐野利秋・別府晋助に接して頗るその風采を慕ひ、遂に島田一良と交を訂して、明治十一年五月十四日參議大久保利通を東京紀尾井町に暗殺し、七月廿七日除族斬刑に處せられた。時に年二十三。

チヨウツラヒヒ 長連弘 加賀藩の老臣長氏の第九代。文化十二年八月十三日出生。幼名を普吉といひ、後に又三郎・將之佐・九郎左衛門といふた。實は本多安房守政禮の次子であつたが、文政十一年二月長連愛に養はれ、新知二千五百石(内五百石與力知)を賜ひ、天保二年十二月四日その後を襲いで遺知三萬三千石(内二千石與力知)を受けた。連弘處士上田耕の説を信じ、之を藩政の實際に應用せんとしたが、奥村繁實の反對するものあるを以てその意を果さなかつた。然るに十四年榮實卒し、弘化四年十二月廿七日連弘は從五位下大隅守に任ぜられて、同志と共に新法の施行に従うたが、その爲す所往々奇矯に走るものがあつたから、嘉永二年の頃から世人は之を目して黒羽織黨といひ、大に非難するに至つた。藩侯齊泰も亦朋黨の弊を思ひ、安政元年六月十七日連弘の年寄職を擡うた。連弘安政四年四月廿二日歿し、享年四十三であつた。法號保合齋、野田山に葬られた。

チヨウツラヒヒ 長連豪 初名此木小次郎。安政三年能登の穴水に生まる。此木氏は長氏から出て之に臣事した。連豪の父連潔の時二百石を受け、維新の後本姓に復した。連豪明治七年より九年に至る間薩南に遊ぶこと兩次、桐野利秋・別府晋助に接して頗るその風采を慕ひ、遂に島田一良と交を訂して、明治十一年五月十四日參議大久保利通を東京紀尾井町に暗殺し、七月廿七日除族斬刑に處せられた。時に年二十三。

チヨウツラヒヒ 長連弘 加賀藩の老臣長氏の第九代。文化十二年八月十三日出生。幼名を普吉といひ、後に又三郎・將之佐・九郎左衛門といふた。實は本多安房守政禮の次子であつたが、文政十一年二月長連愛に養はれ、新知二千五百石(内五百石與力知)を賜ひ、天保二年十二月四日その後を襲いで遺知三萬三千石(内二千石與力知)を受けた。連弘處士上田耕の説を信じ、之を藩政の實際に應用せんとしたが、奥村繁實の反對するものあるを以てその意を果さなかつた。然るに十四年榮實卒し、弘化四年十二月廿七日連弘は從五位下大隅守に任ぜられて、同志と共に新法の施行に従うたが、その爲す所往々奇矯に走るものがあつたから、嘉永二年の頃から世人は之を目して黒羽織黨といひ、大に非難するに至つた。藩侯齊泰も亦朋黨の弊を思ひ、安政元年六月十七日連弘の年寄職を擡うた。連弘安政四年四月廿二日歿し、享年四十三であつた。法號保合齋、野田山に葬られた。